

瞿佑の『香臺集』について

——『剪燈新話』成立の一側面——

岡崎由美

元末明初の文人瞿佑（二三四七—一四三三）⁽¹⁾の傳奇小説集『剪燈新話』は、明代傳奇小説勃興に先鞭をつけた作品として、唐代傳奇の繼承、後續作品への影響、日本文學との關係などのテーマを投げかけてきた。しかし、瞿佑の多種多様な著作のほとんどが散佚した故もあって、瞿佑自身の著作活動の中でこれを處理する試みは稀であるし、又、困難であるともいえる。本稿では一つの試みとして、殘存する瞿佑の説話詩集『香臺集』をとりあげ、『剪燈新話』に連なる軌跡を追ってみたと思う。

一 成立

『香臺集』の書名は、瞿佑が流謫の地保安で、殘存する舊稿をもとに書きあげた『重校剪燈新話』の後序（永樂十九年）

に見える。この『重校剪燈新話』が即ち今我々の見る『剪燈新話』である。

少日讀書の暇、性著述を喜^ぶみ、螢窓雪案筆を手に輕ま^ず。毎に郷丈柘軒凌公（俊雲翰）の稱許する所と爲る。知らざる者は玩物喪志の譏あり。而れども決意回^げげず。殆んど寢食を忘る。久しうして長編巨冊積みて部帙を成す。……詩を作れば則ち鼓吹續音、風木遺音、樂府擬題、屏佳趣、香臺集、采芹稟有り。……事を紀すれば遊藝錄、剪燈錄、大藏搜奇、學海遺珠等の集有り。戊子の歲（永樂六年）譴を獲てより以來、散亡零落して略ぼ存する者無し。

これは瞿佑自身の著作備忘録である。作詩關係の分類に『香臺集』、紀事の項に『剪燈新話』の前身『剪燈錄』が見える。

保安流謫の騒ぎによって散佚したものである。『剪燈錄』殘稿は、詩友であり獄友であった胡子昂の協力によって瞿佑のもとに届けられ、加筆訂正が行なわれた。

では、『香臺集』は如何にして再び陽の目を見るようになったのか。まず、明・郎瑛の筆を借りる。

(1) 香臺詩集、吾杭國初瞿宗吉の作る所なり。玉臺、香臺に擬し、而して各々一字を取りて以て之を名とす。初と曰ひ、續と曰ひ、新と曰ふ。皆百詠なり。公自ら其の旬日にして成れるを序す。予、公の手稿を得、讀む毎に毎に其の學博く才敏きを嘆ず。……昨に蟬精稿を讀みて、又、先輩徐伯齡之に註を爲し、張天錫之に序を爲せるを知る。惜しむらくは刊本無し。未だ其の子孫に藏稿有りや否やを知らず。又、甚だ惜しむ。〔七修續稿〕卷六事物類「香臺百詠」

(2) 吾杭元末瞿存齋先生、……著す所に通鑑集覽鑄誤、香臺集、剪燈新話、樂府遺音、歸田詩話、輿觀詩、順承稿、存齋遺稿、詠物詩、屏山佳趣、樂全稿、餘清曲譜有り。皆見存する者なり。……予が家に又香臺續詠、香臺新詠有り。各々一百首。皆親筆にして序有り。〔七修類稿〕

卷三十三詩文類「瞿宗吉」

(3) 徐伯齡、字は延之、……著す所に大音正譜十卷、醉桃佳趣二十卷、香臺集註三卷、蟬精稿二十卷、舊雨堂稿若干卷有り。〔七修類稿〕卷三十一詩文類「徐伯齡」

『香臺集』は本來、百詠、續詠、新詠、各百首から成る三部作で、瞿佑の流謫と共に散佚したが、その舊稿は全くこの世から消え去ったわけではなかった。そして、それをもとにして徐伯齡註、張天錫序鈔本が現れた。そのいきさつを註釋者徐伯齡（天順から成化頃の人）の隨筆『蟬精稿』で確認しておく。

(1) 先正瞿存齋先生宗吉、嘗て女故事三百絶を詠み、香臺集と名づく。前百首を香臺百詠と爲し、次百首を續詠と名づけ、又百首を新詠と爲す。引用深僻、諷刺切實にして讀者遍く考ずる能はず。事に遇ふ毎に病む。予嘗て菊莊先生（劉泰、字は士亨）の爲に之を言ふ。先生乃ち之に訓詁を爲すを命ず。僭妄を揣らず命を承くるに因りて、三月を閲、而して稿成る。凡そ引く所の書千有餘種、友人海觀先生張天錫之に序を爲して云ふ、……作りし者は誰ぞ、瞿祐宗吉、再た註せし者は誰ぞ、徐伯齡延之。宗吉の事、人の耳目に在り。延之、予の友なり。〔蟬精稿〕

卷十五「香臺集序」

(2) 一たび予、先生(瞿宗吉)の香臺集を読み、その引據奇僻にして之を釋く者無く、後學の病むを惜しむ。菊莊乃ち予に命じて宜しく之に註を爲すべしと。命を承け三たび月を閲、而して書始めて成る。(『蟬精雋』卷四「呂城懷古」)
 その後の流傳の痕跡は以下の書目類に見える。

(1) 『香臺集』三卷

明・高儒『百川書志』史部傳記類

皇明錢塘存齋瞿佑宗吉著。纂言紀事、得百一十題。事關閨閣、辭切勸懲。仍以本事附於題後、傍註係於詩下。資人吟詠之趣、而廣見聞之方、庶幾詠史之作也。

(2) 『香臺集』

明・晁琛『晁氏寶文堂書目』子部雜家類

(3) 『香臺集』一本

明・趙用賢『趙定宇書目』佛書⁽⁴⁾

(4) 『香臺集』即『吟臺詩話』一本

同右 稗統續編

(5) 瞿佑『存齋類編』又『香臺集』三卷

清・黃虞稷『千頃堂書目』子部小說類

(6) 瞿佑『香臺集』三卷

清・黃虞稷原編、^{王鴻緒}張廷玉等刪定『明史藝文志』卷三子部小說

瞿佑の『香臺集』について(岡崎)

家類

(7) 瞿佑『香臺百詠』

清・朱彝尊『靜志居詩話』卷六

(8) 瞿佑『香臺百詠』

清・陳田『明詩紀事』乙籤卷十三

これらの書目は評價史の一面も兼ねている。「史部傳記類」「子部雜家類」「子部小說家類」といった分類は、『香臺集』の敘事性、説話集的性格をとらえたものと見做すことができよう。

一一 殘本

ここに資料として提供する『香臺集』は、舊國立北平圖書館所藏の善本で、戦局の悪化に伴い、一九四〇年米國のLibrary of Congressに移され、一九六五年より臺灣の國立中央圖書館の所藏管理下に置かれたものの一つである。

これは明と推定される藍格鈔本で、藍表紙、三卷一冊。序跋無し。四周單邊。魚尾無し。半葉十行、單行で字數不定。魯魚の失が多い。題簽、目錄、卷頭尾に「香臺集」と記す。現存鈔本には序跋がないが、繰り返される言葉ぐせ(只、底(事)、却、把、裡等の多用)や詩語の類似から同一人の筆

よることが窺われる。また、瞿佑の他の詩との詩句の類似や、明末・馮夢龍の編による『古今小説』卷三十一「明悟禪師趕五戒」の入話に「後來瞿宗吉有詩云」として擧げられた三生石詩が、現存鈔本巻下に「錦福業縁」と題されたものであることから見て、この鈔本の信憑性はほぼ確認しうると考えらる。

目録は詩題を二段組みし、詩題は四字に統一されている。上・中・下巻各四十題、計百二十題を収める。編集形式は『百川書志』の解説通り、詩題の後に七、八十字程度にまとめた本事を記す。長いものは二百字餘りになるが、二十字程度の断片や、詩の内容から離れたもの、二つ以上の本事を一首に詠みこんだ場合などがあつて、註の必要性を感じる。詩はすべて七言絶句。詩の後には註が附され、訓詁を主眼とした引用があるが、本事を新たに引き直したり補ったりする作業も行なわれている。なお、註及び本事には引用書名が明記されている。

その本事引書を類別すると、最も多いのが史書(貴嬪)、次いで詩話(妓女、才媛)、傳奇小説、後は雜記類である。『剪燈新話』に繰り返される、樂昌破鏡、鶯鶯傳、柳氏傳、綠珠、碧玉、舉案齊眉、卓文君、買女偷香、玉蕭姻縁、流紅記

等々の典故は、まず『香臺集』に出揃っている。

徐伯齡の「引書千有餘種」という記述を信用すれば、現存鈔本の註はその三分の一にも満たない。また、現存鈔本は収録百二十首だが、『百川書志』記載のものは百十首となっており、この記述に誤りがないとして、散佚による異本の一つなのか、現存鈔本から十首を削ったのみなのかはわからない。

今のところ現存を確認できたのはこの中央圖書館本一本のみなので、流傳系統を明らかにするのは困難であるが、この鈔本は瞿佑撰・徐伯齡註鈔本の一つと推定される。

三 軌跡(1)——衰亡

見るからに多作速筆、博覽強記による『香臺集』は、必ずしもその一首一首の巧拙を云々すべき資料ではない。閨閣を詠み、『香奩集』に擬すというが、その内容は女性の媚態や閨怨を詠むものではなく、もっと具體的な敘事性に即している。『剪燈新話』に連なる資料としての價値を考えた時、その特徴の一つは、『百川書志』が「詠史の作に近い」と記したように、その歴史感覺にある。

貴嬪の逸事が多いのは、或いはテーマの類別があつて、この部分を中心に残ったのであろうか。『通鑑集覽鑄誤』『管見

「摘編」等の歴史評論を編んだ知識と興味の餘滴としてうなづける。

爲政者の側に待す女は直接歴史の節目に接する。珍しい詩材ではない。だが、「亡國」「人事改」の語は、瞿佑の知識のみならず、實生活の中にもあった。張士誠が蘇州を占據したのは瞿佑十歳の時。姑蘇、四明、會稽等の地を轉々とし、十二歳で洪武元年（一三六八）明王朝の確立を見る。明・陳霆『渚山堂詞話』によれば、張士誠政權崩壞の前年、瞿佑は再び姑蘇を訪れている。王朝交替期の騷亂。それに巻き込まれた人々。この時の記憶は、瞿佑の文筆活動に大きな醸成作用を果たしたようだ。それは『剪燈新話』に於て、元末の激動が直接物語の背景になるものと、舊來の志怪小説の枠を借りて歴史論評を展開するものの二種に見られる。前者は張士誠の亂を舞臺に男女の離別を描いた「愛卿傳」「翠翠傳」「秋香亭記」である。「三山福地志」「富貴發跡司志」にも、個人の宿命と重なって元末の歴史の宿命が影を落とす。後者は、逢鬼譚を借りて、反亂起義者の末路を論じた「華亭逢故人記」、桃花源傳説を借りて南宋の亡國を描いた「天台訪隱錄」、仙界淹留譚の形で吳越興亡を伍子胥に語らせた「龍堂靈怪錄」、冥婚譚に南宋・賈似道の亂脈政治を綴った「綠衣人傳」であ

瞿佑の『香臺集』について（岡崎）

る。そして、話中に歴史を語る役目を負った人々も、歴史の變轉、政治の非情に呑み込まれた者の幻影なのである。

『香臺集』で詩話に構想を得たものでは、「朝雲誦謁」「絳桃留待」「柳枝放歸」「韋娘新粧」「心兒字意」等がある。蘇軾の愛妾朝雲、韓愈の二妓絳桃と柳枝、白樂天の二妾樊素と小蠻、劉禹錫の詠んだ杜韋娘、秦觀の詠んだ陶心兒を詩題として、流滴の蘇東坡、劉禹錫、邊塞の韓愈、秦觀、晩年の白樂天を還元する。

自身も又文人の一として自負を持ち、同時に時代にかみあわぬ疎外感を抱いていたであろう瞿佑が彼らに寄せる興味は、『香臺集』から『剪燈新話』さらに晩年の作『歸田詩話』へと變わることなくモチーフを紡いでいる。ただそこには、時と共に増幅されてゆく瞿佑の内面があった。元朝の衰退による禁の緩和と江南の經濟的文化的繁榮の上に文壇は花開く。楊維禎、錢惟善、張光弼、丁鶴年、凌雲翰等、當時の著名な文人が訪れる環境の中で、瞿佑は元末江南文壇の空氣を吸った最後の世代であったといえる。その接觸は一瞬の光芒にも似ている。瞿佑は幼く、文壇はたそがれを迎えていた。酒朋詩友凋落盡——瞿佑は長輩の晩年・朋友の零落を見つつ、青年から壯年にかけて、筆禍殿しい洪武治下に、訓導・國子

助教という危険な職を歴任した。やがて、自身も錦衣獄と流謫に流落の晩年を送る。『歸田詩話』には、文壇の大御所達に詩才を愛でられた少年期、ほとんど記述のない任官期、失意の流謫期の塗り分けがある。『香臺集』の詩材としての不遇の文人像は、自己の衰亡と他の衰亡が一體化する閑歴の中に收斂されてゆく。無位無官にして文人の榮譽を賜わる「水宮慶會録」、冥界の筆禍を惹く「令狐生冥夢録」、死して後も散佚した著書を惜しむ「修文舍人傳」、處士でありながら仙女に人徳を見込まれた「鑑湖夜泛記」。『剪燈新話』の様々な文人像も、この軌跡の上に紡ぎ出されたものであろう。そういう意味で、『香臺集』『剪燈新話』『歸田詩話』は同じ色調を含んでおり、ただ明度が違うのである。

四 軌跡(2)——諷と戯

『香臺集』には、諷刺、皮肉、揶揄といった、軽い毒のある戯詩風のものが多い。「底事」「却」といった語句の多用も、揶揄を型通り導き出してくる。恐らく瞿佑には始めから戯詩に仕立てる意圖があっただろう。女故事を集めたとして閨情詩集とばかりは言えない處である。例えば、

13 花妖惑主(卷上)

社鬼祠神總遁藏 花妖月魅敢披猖
梁公正直難欺侮 却事官中武媚娘
〈鬼神も妖魅も畏れて避ける狄仁傑ほどの清廉な人が、よりによって武后に仕えるとは〉

14 毛女成仙(卷上)

童女樓船去不歸 三山何處覓靈芝
神仙只在秦宮裡 底事君王却不知

〈不死の薬は餘の地に有らず。成仙した女がお膝元にいるのに、海の果てへ徐福を遣し、待てど暮らせどなしのつぶて〉

24 樂昌破鏡(卷上)

送舊迎新可自由 笑啼不敢強包羞
誰能耐久知江令 垂老還家尙黑頭

〈夫を換えたのは亡國の騷亂に弄ばれた樂昌公主ばかりではない。江總は亡國の騷亂を乗り切って、梁・陳・隋と君主を換えているではないか〉

87 柳氏重婦(卷下)

舞徹腰枝擅物華 風流只合在詩家
韓郎可是攀來慣 他日重吟御柳斜

〈柳氏との風流事こそふさわしい。章臺柳ばかりでなく「御柳斜」と詠んで徳宗の覚えめでたくした韓翃だから、柳の枝

は折り慣れていようものを」

毛女・素娥・樂昌・柳氏の詩材と秦始皇・狄仁傑(武后)・

江總・韓翃の主題との二色刷りは明瞭である。『百川書志』は本書を評して「事關閨閣、辭切勸懲」と云う。軽い揶揄にとどまるものもあるし、詩材の女性がそのまま諷刺の主題になることもあるが、「閨詠」という取材の枠に何らかの「諷」を塗色するものが多いという事である。とりわけ皮肉の大半は、政變を招いた爲政者——周幽王、秦始皇、梁武帝・元帝、隋文帝・煬帝、玄宗、後梁太祖等に向けられている。

四十四年ぶりに『剪燈新話』の舊稿に朱を入れた瞿佑は、後序で云う。

彼の時は年富力強うして言を立つるに鋭く、或は傳聞未だ詳かならず、或いは鋪張太だ過ぎて、未だ疎率する所有るを免れず。

『香臺集』の才走った遊戯性は往年の筆致を裏書きする。『剪燈新話』の舊稿に見える吳植の引(洪武十四年)は、評して「其辭則傳奇之流、其意則子氏之寓言也」と云う。『百川書志』の「香臺集」評と重なるのは、不思議ではあるまい。女故事を専門に集め「閨詠」の體に統一する。好んで怪奇の譚を集め「傳奇」の風を類型的に再生産しようとする。この

瞿佑の『香臺集』について(岡崎)

趣味に遊ぶ好事家の要素は瞿佑の「戯」であり、「諷」の補色となる一種の韜晦ともいえる。

この二書に於て、諷を發色させる條件の違いは、『香臺集』は既存の事件に評を附す形で読み手の立場に立つが、『剪燈新話』は恐らく創作意圖がもっと深刻で、舊套に據るといっても、それを加工して物語を整える、書き手の立場が強く求められる事；前者は、一般に爲政者を直接取材・批評するが、後者は市井の民で、「哀窮悼屈」の形をとる事；少なくとも現存本では、前者の取材範圍は宋以前であるが、後者は元末明初という生々しい時代に固執する爲、説得力もあるが諱避する處もある事、などが考えられる。瞿佑の係り方の深刻さと創作形式の複雑さの分、諷と戯の緊張度は異なるのである。

その事が、『剪燈新話』の敘述の外形に及んでいる例がある。前章で舉げた「天台訪隱錄」「華亭逢故人記」「龍堂靈怪錄」「綠衣人傳」の一群は、傳奇の情節から分離して歴史上の實在人物を追う部分がある。「天台訪隱錄」が、筋は「桃花源記」と全く同じなのに量が倍以上になったのは、南宋の滅亡と人物評の部分が、露出したまま挿入されているからである。加工の量的増加が筋の質的變化に結びつかない。明・

田汝成『西湖遊覽志餘』⁽¹⁰⁾に収録された「綠衣人傳」は、賈似道の逸話部分を全く除去して、なお筋に變化なく纏っている。

この形式上の明瞭さは、物語の舞台と挿入部の時代的疎隔、即ち粹物語と昔語りの構成による。昔語りの部分で、主人公は沈黙して傍聴者となるから、筋の膨らみは停滞する。そこには、本来の情節展開には必然性が希薄だが、瞿佑の意識するテーマには大いに必然性を持つ内容が奔流するのである。

瞿佑自身の體驗と知識に基いた、歴史・社會觀を映す「諷」と、それを韜晦する「戲」との緊張は、この例では敘述を二つの次元に引き裂いているといえよう。諷刺が情節に隠された篇にも、多かれ少なかれ、この緊張によって筋から露出或いは孤立した寓言部分がある。このような現れ方をする「諷」の、具體的な内容分析については、近藤春雄氏や堀田文雄氏の研究⁽¹¹⁾に詳しい。

五 軌跡(3)——奇を傳ふ

『香臺集』の取材には、實在の人物に関する逸話と架空の人物を描いた物語とが混在している。吟詠はおおむね事件の内容を對象にしているが、その中に幾つか、虚構を虚構として捉え、その作意に言及したものがあつた。例えば、卷上に

「神女行雲」という詩がある。巫山神女を描いたものとはいえない。

神物何嘗與世通 書生自欲語王公⁽¹²⁾

已將雲雨誣幽夢 更把雌雄誑大風

へ高唐賦のでっち上げでは足りず、風にも大王と庶人の別がありません、と王をたぶらかす

内容は宋玉への辛辣な皮肉である。このモチーフは、「鑑湖夜泛記」(『剪燈新話』卷四)につながっている。

(1) (嫦娥、后土、巫神、湘靈) 是れ皆聖賢の裔、貞烈の倫なり。烏んぞ世俗の謂ふ所の如き有らんや。……雲は山川の靈氣、雨は天地の沛澤なり。奈何ぞ宋玉の謬に因りて輒ち指して房帷の樂と爲さんや。之を衽席の歡に譬ふるは、神を慢り天を瀆すこと此より甚しと爲すは莫し。

「鑑湖夜泛記」は、一處士が天の川で織女に會うという仙境淹留譚であるが、筋の大半は、織女が處士と問答しながら、世間の神女傳説の眞偽辨別を行なう論證に終止している。織女は、まず牽牛織女傳説の虚妄を指摘し、『齊諧』『荆楚歲時記』、柳宗元、張文潛らを名指して、世を誤る鄙語邪言ときめつける。さらに筆は織女以外の神女傳説に及んでいくが、先に擧げた巫山神女はその一部であり、續いて次の例を記す。

(2) 李群玉なる者、果して何人ぞや。敢へて淫邪の詞を以て

黃陵の廟を瀾して曰く、

不知精爽落何處 疑是行雲秋色中

と。自ら奇遇を述べ、引きて其の身に歸す。誕妄矯誣、名檢地を掃ふ。

(3) 后土の傳、唐人敢へて明らかに則天の惡を斥さず、故に此を假りて以て之を諷せるのみ。世俗識らず便ち謂へらく、誠に然りと。

韋郎年少耽閑事 案上休看太白經

の句有るに至る。

織女は極めて手殿しい。

士君子、名教の中に於て自ら樂地有り。何ぞ鄙猥を造述し、高明を誣謗し、既に以て其の心を欺き、又以て世を惑し、而して自ら過有るの域に處るに至らんや。

「鑑湖夜泛記」の處士成令言は、これら惑世の文人の對極として設置され、妄語を戒め、世に眞實を傳えよと織女に託されるのである。

こういつた文人の描き方には、瞿佑の儒士としての面目が保ってくるが、その意圖が、眞劍に怪力亂神の瀆神性を逐一批難する爲でない事は、瞿佑の詩文に頻出する、巫山雲雨を

瞿佑の『香臺集』について(岡崎)

始めとした「誕妄」の典故を指摘するまでもなからう。「怪力亂神を語」るのは、瞿佑のみに好むところである。羅列した個々の具體例も、亦「戲」の側面ではないか。瞿佑の寓言は、道正しき處士である主人公の人物設定と、織女が頻りに繰り返す言葉——「心ない妄言に辱めを受ける」とに集約されよう。神怪艶情そのものを否定したら、「剪燈新話」の存在は矛盾である。語るな、とは言わぬ。語り方によるのだ、と言う。そんな矛盾回避は、「剪燈新話」自序に見えている。「鑑湖夜泛記」の舉例論證中には、『香臺集』『歸田詩話』とつき合わせてみると、この讓歩を支える視點に觸れた部分を持つのである。

まず、『歸田詩話』には、小説創作の虚構について纏めた一項があり、そこに總括を求めてみよう。

元微之……其れ鶯鶯傳を作る。蓋し名を張生に託す。復た會眞詩三十韻を製り、微かに其の意を露す。而れども世悟らず、乃ち謂へらく誠に是の人有り。癡人の前に夢を説くに殆きなり。唐人の奇遇を敘述するは、后土傳の名を韋郎に託し、無雙傳の名を仙客に託するが如く、往往にして皆然り。(卷上「鶯鶯傳」)

假託による虚構というものがあつたのに、世人は理解しない。

「鑑湖夜泛記」の後土傳説解説の口調である。「后土傳」の作意については、『香臺集』の方が詳しい。

10 后土瓊花(卷上)

阿武臨朝若鬼神 春風屢動壁衣塵
唐臣不敢揚君惡 移傍瓊花觀裡人

「后土傳」は、神婚譚に假託した、武則天諷刺の作である、という點が一貫している。「鶯鶯傳」についても、『香臺集』に言及されている。

63 崔鶯待月(卷中)

殘粧在臂淚光熒 香霧空濛月半明
吟就會眞三十韻 須知元子是張生

轉、結句の意が、『歸田詩話』の論調と同じである。

瞿佑が宋・劉克莊の『後村詩話』を讀んでいたことは、『歸田詩話』に見えている。先に挙げた『歸田詩話』の奇遇の辯は、この中に遡ることが出来る。

唐人の奇遇を序述するは、后土夫人の事これを韋郎に託し、無雙の事これを仙客に託するが如く、鶯鶯の事元稹自ら敘すと雖も、猶ほ張生を借りて名と爲すがごとし。

惟だ沈下賢の秦夢記、牛僧孺の周秦行記、李羣玉の黃陵廟詩、皆攪りて其の身に歸す。名檢地を掃ふ。(『後村詩

話」前集卷一)

『香臺集』「鑑湖夜泛記」『歸田詩話』の糸が、ほぼ束ねられた。「鑑湖夜泛記」から、「瀆神の邪言」云々を割り引いてみれば、李群玉批判の背後にあるのは、「引(攬)歸其身」即ち「奇遇」敘述に於ける假託と虚構のセオリーに反している事である。

又、陳師道も瞿佑が愛讀した詩人の一人であり、その著『後山居士詩話』の中には、

唐人の後土の事を記すは、以て武后を譏るのみ。

という辯と共に、「鑑湖夜泛記」が引用した文章も見られる。(15)

『後村詩話』に記された『秦夢記』『周秦行記』への言及は、『歸田詩話』の「鶯鶯傳」前出の條の續きにある。

惟だ沈亞之の秦夢記、牛僧孺の周秦行記、乃ち自ら引きて其の身に歸し、復た隱諱せず。然るに周秦行記と僧孺著す所の幽怪録、文體絶だ相類せず。或るひと謂へらく、乃ち李德裕門下士の作る所にして、以て僧孺の犯上無禮、僭逆の意有るを暴き、蓋し禍を嫁すと爾か云ふ。理或いは然るなり。

實名は本來隱避するものであればこそ、それを逆手にとつた惡意の作も出てくる。劉克莊は、これを「唐人私忿を挾み

て虚説を騰ぐ」と解説する。

『香臺集』卷上「秦女吹簫」は、蕭史と弄玉の昇仙故事に取材するが、

玉瑄雙吹引鳳凰 曲終同赴白雲鄉
如何後日秦臺夢 不見蕭郎見沈郎

とは、ここまで述べてきた内容から見て、沈亞之の『秦夢記』を揶揄したものと解せられよう。

こうして再構成される視點は以下のようになる。

- (1) 奇を伝えるに於て、虚構は虚妄とは別であり、それは假託の精神によること
- (2) 假託の精神は、本来、實名實寫を諱避すればこそそのものであること

(3) 假託の眞意を理解せぬ世間に不満であること

『香臺集』には、わずかながら、このように虚構の作意を解釋してみせる例があり、この傳奇讀者としての視點は、『剪燈新話』に於て、人物設定やその行動言辭に瞿佑の立場を彷彿させる所が有る點で、實踐につながる。これは、言論に喧しい時代背景の中に、傳奇小説の生かし方を得たという意味で、「戲」の役割にも係ってくる視點である。

瞿佑の『香臺集』について（岡崎）

結語

『香臺集』と『剪燈新話』の特徴は、以下のように對照される。

- | | |
|----------------------|------------------------|
| (1) 説話詩集である。 | (1) 傳奇小説集である。 |
| (2) 「事關閨閣、辭切勸懲」 | (2) 「其辭則傳奇之流、其意則子氏之寓言」 |
| (3) 「詠史の作に近い。」 | (3) 歴史の騷亂に弄ばれる人々を描く。 |
| (3') 取材は宋以前。 | (3') 舞臺は元末明初。 |
| (4) 読み手の立場。説話・小説の受容。 | (4) 書き手の立場。小説の再生産。 |

このように、素材と作品の回轉を軸に、二書はあたかもボジとネガの如き位相を呈する。そこには、自と他の衰亡に追われ續けた閱歴、文才の自負、歴史研究書執筆者の横顔、好事家の蒐集癖と遊戯性、凝り性な著述家といった瞿佑の人間像が展開されるのである。

〔注〕

- (1) 生年は、『剪燈新話』後序「永樂十九年次辛丑正月燈夕七十五歳」、卒年は『列朝詩集』『浙江通志』の「年八十七卒」

に據った。

- (2) 『四庫全書總目提要』卷二二二に據る。
- (3) 『四庫全書珍本二集』子部雜家類(清乾隆中敕輯、王雲五選、民國六十年臺北臺灣商務印書館用故宮博物院藏文淵閣本景印)。十六卷本である。
- (4) この中には雜記雜説も含まれている。
- (5) 『吟堂詩話』は『歸田詩話』の異名であり、書名混亂も考えられる。
- (6) 一九八三年八月、原本閲覽の際には、中央圖書館の管理下、故宮博物院圖書室に收藏されていた。日本では、東洋文庫にマイクロフィルムがある。なお、臺灣偉文圖書出版社刊の秘笈叢編に校本がある。
- (7) 卷三「瞿宗吉寓姑蘇、作八聲甘州以自遣、首闕云：『荷危樓翹首問天公、何時故鄉歸。對碧雲千里、綠波一道、山色周圍。風景不殊疇昔、城郭是耶非。滿新亭淚、獨自沾衣。』其自敘云：『丙午秋、重到姑蘇、登樓有作。』按丙午乃至正二十六年、時張士誠尙據姑蘇。明年丁未滅亡。」
- (8) 『歸田詩話』卷下「鍾馗圖」。凌雲翰の死を悼んで詠んだもの。
- (9) 以下は『香臺集』百二十首の通し番號。
- (10) 卷二十六「幽怪傳疑」。元來、「綠衣人傳」の挿入話は、『錢塘遺事』や『東南紀聞』等の雜記から抜き書したものである。
- (11) 近藤春雄「唐代小説と剪燈新話」(『唐代小説の研究』第四章第二節)、堀田文雄「剪燈新話」考(『集刊東洋學』39)
- (12) 後半の内容から見て「諂」(諂は別字)とすべきか。「神女行雲」の條は誤寫が特に多い。
- (13) 「則又自解曰：詩書易春秋、皆聖筆之所述作、以爲萬世大經大法也。然而易言龍戰于野、書載雉鳴于鼎、國風取淫奔之詩、春秋紀亂賊之事、是又不可執一論也。」
- (14) 卷中「沈園感舊」。陸游の詩の解釋について、「後見劉克莊續詩話……」と記す。
- (15) 「(余謂) 欲界諸天、當有配偶、其無偶者、則無欲者也。」
- (16) 『後村詩話前集』卷一。「歐陽率更貌癡、……好事者遂造白猿之記、謗及其親。……唐人挾私忿騰虛謗、良可發千載一笑。亞爲李德裕客、白敏中素怨德裕及亞父子、姪傳必白氏子弟爲之、託名行簡。……如周秦行紀世以爲德裕客韋絢所作、二黨眞可爲戒。」
- (17) なお、村上知行氏(『剪燈新話と江戸文藝』)によれば、登場人物の名には普通による寓意がある。これなど「託名」を更に洒落てみせた、「戯」の好例だろう。